

昭和20年7月15日 常呂空襲の記録

*昭和20年7月15日、米軍機の常呂村空襲によって、常呂村民1人が犠牲になりました。このときのこと断片的に綴られている資料や証言をまとめました。

昭和20年7月に入ると、米軍機は常呂上空にもあらわれるようになった。そして、霧の晴れた7月15日、空襲警報下の午前10時過ぎ、グラマン戦闘機2編隊が常呂上空から岐阜・栄浦の海岸ぞいに襲来した。オタチップ沖で操業中の漁船に機銃を掃射、漁船員1名が死亡した。『常呂町百年史』から抜粋

7月15日の空襲では、常呂漁業会所有の第3常勝丸が青年部川崎船の曳船として従事中、敵機グラマン戦闘機の襲撃を受けて被弾、船長が殉職した。

『常呂漁業協同組合40年誌』から抜粋

「終戦特集」 常呂オホーツク大学4年 國枝 奉征

見た！見つけた！60年前の記憶…その日、昭和20年7月15日の昼近く、空襲警報のサイレン。敵機2機編隊が常呂市街地上空に飛来、オタチップ沖で操業中の漁船を銃撃、乗組員が犠牲に。

…常呂地区については、サロマ湖に水上機の基地があると思われていた。これらの偵察、岐阜・栄浦より西に飛来の記録はない。

…私は当時3歳の子どもであった。隣の家の屋根の上を低く低くかすめていく濃青色の機体。一瞬、目に焼きついた機影…。ある日、書店の特集号の中に、あの日見た飛行機、「SB2Cヘルダヴァー爆撃機」を見つけた。後部座席の機銃、丸みある尾翼…、60年前の記憶…。私の一瞬の戦争体験！

『平成27年度 常呂オホーツク大学文集 トーコロ』掲載文を抜粋・編集

*注：國枝さんは、オタチップの方角から岐阜地区に飛来してきた機体を見たことを証言している。

「古川寿さんの空襲の記憶」

*本通りに住む古川寿さんにお話を伺い、まとめたいことを紹介します。

昭和20年7月15日、飛行機の爆音を聞き、自宅の裏に造った防空壕に家族で避難しましたが、古川さんの父親（大作さん）は、道路を挟んで常呂川沿いにあった消防番屋へ向かい、やべらを上って半鐘を鳴らしました。大作さんは消防団で番屋から近いこともあり、半鐘を鳴らす係だったそうです。そのうちに半鐘の音が消えたので、母親（ソトエさん）は、てっきり大作さんが機銃で撃たれて亡くなったと思い、古川さんたち家族に話したとのこと。

飛行機が去ってから、古川さんは消防番屋まで走り、大作さんの無事を確認します。

古川さんの記憶にはっきり残っているのが、この飛行機の爆音と消防番屋まで走っていたことの2つです。爆音は、それまで聞いたことがない大きな音だったので、今でも耳に残っているそうです。後で低空で旋回していたを聞き、とてつもない音として記憶したと話しています。

また、住宅裏が砂山状になっていて、そこを掘ってコンクリートで囲い、土で覆い、内部をL字型にした10畳ほどの防空壕を造っていたとのこと。道路を挟んで斜め向かいにある竹岡菓子舗には、住宅の床下に大きな室（むろ）があって、空襲の時はそこに避難したそうです。

「六十年間埋もれていた死者」 菊池慶一

死亡した漁船員を確認するために、常呂町へ何度も出かけて聞き取りをした。役場、漁協、漁師、お年寄り、お寺などを聞き回ったが、「船に乗っていた漁師が撃たれた」と誰も言うばかりで、それ以上の手がかりはなかった。

当時常呂村にあった診療所で働いていた看護婦の小林小代さんが、「運び込まれて来たときは、もう口もきけませんでしたね。どんな処置をしたか記憶にありませんが、たしかいくらもたない間に息を引き取りました。何という名前の人が記憶にありません。カルテはあったでしょうが、何十年も経って処分されたと思いますよ」と語るだけであった。

そこで十四人の犠牲者を慰霊する「網走空襲の碑」に、追加として「無名犠牲者 四八歳 常呂町 漁船員」という石版をはめ込んで十五人とした。

平成十七年（2005）七月十五日、網走空襲六十年のつどいを開いた。その話し合いの中で参加者の一人、松田和夫さん（当時五歳）が突然、「常呂での犠牲者は濱本さんという人だ」と発言した。近所に濱本さんの家があり、その父親が空襲で亡くなったのを記憶しているという。

早速松田さんの協力で、市内に住む濱本さんの息子、濱本喜八郎さん（当時六歳）を訪ねて確認した。その結果、まぎれもなく常呂空襲での犠牲者は濱本嘉太郎さんであることが判明した。嘉太郎さんは網走在住だったが、当時常呂魚組所属の第三常勝丸に乗り組んでいたのだった。

：平成十七年八月二十九日、濱本嘉太郎さんの追悼のつどいを開いた。遺族の濱本喜八郎さん、常呂漁業組合の代表、市内有志が集まって改めて冥福を祈った。無名者とした石碑の銘板に「濱本嘉太郎」と刻み、六十年ぶりに網走空襲の調査は終結したのだった。

『語りつぐ北海道空襲』（菊池慶一／著）から抜粋

* 「オタチップ」

『常呂町百年史』第1章第5節「常呂町アイヌ語地名の記録」から抜粋

『常呂町百年史』では「オタチップ」と表記して説明

オタ・チップ（砂の・舟）の意。砂丘の小高い山を舟にみたて名であろう。

常呂から砂丘の旧道を行くと、澱粉工場のところを下る少し手前に、目立つ円頂山の下を通る。常呂平野の西3線からも見える。多くの日誌にこの名が出てくるのは目だった存在だったからであろう。今でも土地の人たちは西3線地先の砂丘のあたりをオタチップと

いう由。地籍図には西4線先の海側がオタチツプとなっている。

『常呂町百年史』掲載の
常呂町海岸付近の地名説明図

